

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第664号 平成25年12月24日

今年の流行語大賞（3）

「倍返し」は、テレビドラマの主人公「半沢直樹」の決め台詞ですが、熱血漢で、どんなに厳しい環境に置かれても弱音を吐かず、最後は敵に対して容赦なく「倍返し」と見栄を切る。そんな姿に拍手喝采した人は多かったと思います。

視聴率は、出だしは2割台だったものが後半からは3割台に、そして最終回は何と4割を超え「家政婦のミタ」を超えたといわれます。確かに、主人公「半沢直樹」のキャラクター、ドラマチックな筋立て、展開の速さ、これらを見れば視聴率の高さも理解できますが、視聴者から爆発的ともいえる関心を呼んだ背景はそれだけではない様です。

今時、「部下の成功は上司のもの、上司の失敗は部下のもの」といって憚らない管理職は、ブラック企業でもない限りそんなにいるとは思えませんが、しかし、それに近い様な理不尽な事は現実の会社組織の中では日常茶飯にあり、それに反抗もならず流されていると感じている人にとって「半沢直樹」というドラマは、その鬱屈した気分を開放してくれるのに十分だった様に思います。実は、こうした気分こそ、視聴率を押し上げた一番の理由ではないかと、私には感じられます。

しかし、視聴者が「倍返し」で気分は盛り上がったとしても、何も変わらない現実目の前にはある訳で、ドラマの方も、主人公の「半沢直樹」が、父親の敵である大和田常務に復讐を果たしながら結局は出向させられて終わるといふ、厳しい現実を見せ付けています。

「やられたら倍にして返す」というのは、生き馬の目を抜く様な商売の世界では当たり前なのかも知れませんが、人と人の関わりの中で考えれば、「倍返し」という事だけでは真の問題解決はおろか、達成感を得る事も難しだろうと私は思っています。

調査結果の概要

大人から「やられたらやり返して良い」と教わった事があるか。

項目	小学生		中学生	
	あり	なし	あり	なし
いじめの経験なし	28.2	71.8	37.5	62.5
被害経験あり	37.3	62.7	49.0	51.0
加害経験あり	38.1	61.9	51.0	49.0
両方の経験あり	44.7	56.3	54.2	45.8

(注)朝日新聞の記事から作成しました。

この「倍返し」という事に関して、NPO法人「ジェントルハートプロジェクト」は大変興味深い調査結果を公表（10月3日付朝日新聞他）しています。

それによると、15都道府県の小中学生ら約8400人を対象に調べたところ

ろ、左表の様に、大人から「やられたらやり返せ」と教わった子供はいじめの被害者や加害者になりやすい傾向が浮き彫りになったというものです。

「やられたらやり返せ」という事を当然だと考える方がいますが、私はまったく感心しません。私には、「やられたらやり返せ」と教える事といじめとの因果関係は良く分かりませんが、少なくとも、「やられたらやり返す」という事だけでは根本的な問題解決には何も繋がらないと考えているからです。

しかも、親から「やり返せ」と幾らいわれたとしても、「やり返せない」場合は多い筈です。そうなると、いじめられている子の避難場所は無くなり、精神的にも追いつめられる事になりかねません。一番大事な事は、親はもとより学校も、いじめを受けている子をまずはいじめから守る事であり、いじめている子に対する指導を徹底する事です。いじめられている子に対しては、「やられたらやり返せ」ではなく、むしろ報復しても問題の解決にならない事を教えるべきです。

いじめに対して毅然と立ち向かう事と、「やられたらやり返す」という事との違いを、子ども達にはしっかりと教える必要があるのではないのでしょうか。

また、調査結果では明らかではありませんが、「やられたからやり返した」相手が、自分をいじめた子ではなく、自分よりもっと弱い子に向いてしまうことも十分ありえます。「やられたらやり返す」という行動原理は、新たないじめを生む可能性を秘めているという事だと思います。

「やられたらやり返せ」と教えることは、「お前もそんなつまらぬ人間になれ」と教える様なものです。そんな事は、どの親も望んではない筈ですよ。

(塾頭：吉田 洋一)